

昭和一〇年前後における新人——『作品』・石川淳を手がかりに

松 本 和 也

キーワード 新人、昭和一〇年前後、『作品』、石川淳、芥川賞

I

文学史上の文芸復興(期)は、たとえば次のように概説される。

「純文学」の衰退が懸念された数年間を経て、昭和八年頃から今度は一転して「文芸復興」が叫ばれるようになり、以後戦時体制へと移行するまでの三〜四年間、文壇は再び活気を呈することになった。現象として最も目立ったのは、それまで事実上「新潮」一誌であった純文学商業ジャーナリズムに、あらたにこの年、「文学界」「行動」「文藝」が名乗りをあげた事実である。『文学界』が毎号新人の発掘に力を入れ、「文藝春秋」が翌昭和九年に芥川賞、直木賞を設立したのも(第一回授与はその翌年)、メディアの需要に伴って、既成流派を超えた「新人」への待望論が高まりを見せていたからにはかならない。

本稿では、文芸復興期のトピックから新人に焦点を絞る。新人に関して、その小説表現の特異性が注目される一方、層としての新人全体の動向については研究が進んでいない。本稿のねらいは、昭和一〇年前後の新人に照準をあわせ、小説および同時代言表の分析を通じて、その様相を具体的に描き出すことにある。

II

文芸復興期¹昭和一〇年前後のトピックの一つは新人待望の機運である。弱法師「大波小波 新人の整理」(『都新聞』昭10・7・27)によれば、『一昨年の正月以来、文芸復興の呼び声に応じて、新作家は非常に待望され優待されはじめた』というが、事実、「文芸復興座談会」(『文芸春秋』昭8・11)で杉山平助は、『今の文芸復興といふことについての現象的なものは、新人を待つてゐるといふことがその焦点』だと発言している。《新人を待望する気運は確かに動いてゐる》と認める川端康成も「新人待望」(『文芸通信』昭9・1)で、『古い同人雑誌に拠る人々は、新人と呼ぶべく既に文壇的には余りに古い気がする』としながらも、期待する新人候補群を同人雑誌とあわせて次のように紹介している。

「麒麟」にゐる人々では中谷孝雄、川崎長太郎、古木鐵太郎、那須辰造、寺崎浩、蔵原伸二郎氏等がある。中谷氏の「春」はい、ものだつた。川崎氏も最近認められて来た様だ。蔵原氏などは僕と同じ頃の古い人だ。伊藤整氏もつと活躍してい、と思ふ。「作品」に発表された中村地平氏、「海豹」の大鹿堯氏にもい、ものがある。「小説」には丹羽文雄尾崎一雄氏がゐる。「三田文学」も多士濟々だ。新刊の「日曆」には、比較的新し

く書き初めた人が多いらしいが大谷藤子氏は古い。新田潤、高見順氏等がある。／女流作家で戸川エマ、堀壽子氏が、すれてゐないからい、と思ふ。／批評家としては「コギト」の保田與重郎氏が、と思ふ。／永井龍男氏なんかも、怠けないで働かなければならない人である。／プロレタリア文学では、文化集団に載つた佐々木久男(?)といふ人の百姓小説がよかつた。

また、「純文学のために——新人作家を評す——」(『文芸』昭9・7)で岡田三郎は、『文芸』の記者君に聞いた新人として『福田清人、和田伝、石坂洋次郎、永井龍男、大谷藤子、徳田一穂、川崎長太郎、中谷孝雄、那須辰造、仲町貞子、鈴木清、本庄陸男、張赫宙、阿蘇弘、金親清、荒木巍』の一六名をあげ、『ジャーナリズムの職業戦線に立つて、四六時中新人作家等に耳目をそばだててゐる記者君の鑑別』ゆえとその人選を保証しつつ、自ら丹羽文雄、榊山潤、寺崎浩、伊藤整、大島敬司、尾崎一雄、山内せい子、外村繁を加えている。『数多き新進作家のうち、最新であり且つ注目に価ひする人人は誰れと誰れとであらうか。試みに、四五人を撰んでくれと、或文壇通に訊いた「新進作家論——(文芸時評)——」(『中央公論』昭10・3)の正宗白鳥は、『島木、鈴木、丹羽文雄、大谷藤子、中谷孝雄なんかであらうか』という回答を紹介している。翌年には、大宅壮一「新版文壇地図」(『文芸』昭11・6)も出て、次のようなメンバーの名前があげられている。

更にこ、一二年の間に頭角を現した新人の中では、プロ派の、**島木健作**、芸術派の**丹羽文雄**の二人が、すでに「新人」の域を脱して中堅級に入ったといへる。／続いて**石川達三**、**伊藤整**、**大鹿卓**、**栗田三蔵**、**寺崎浩**、**太宰治**、**中谷孝雄**、**外村繁**、**中山義秀**、**上林暁**、**渋川驍**、**那須辰造**、**尾崎一雄**、**福田清人**、**井上**

友一郎等々の新人群の中から、今年度以後において果して誰が今一段の飛躍をとげるか、それとも全然新しい新人がどこから彗星の如く現れてくるか。

個々の名前の有無やその重なり(とずれ)にも増して重要なのは、新人をあげようと思えば列挙でき、実際そうした機会がジャーナリズム上で折々準備されるといつた具合に、この時期、層としての新人が目を集めていたという事実それ自体である。この基底には、**安田龍雄**「文芸POST 四月文芸新人短評」(『文芸』昭10・5)が指摘する、老大家復活以降の次の状況／認識が想定される。

幾何ら危なつけないからと云つて、千篇一律所謂大家の繰言をのせて、文壇を益々動脈硬化させることは、公器であるヂヤナリズムは断然避けねばならない、そしてどしどし／／新人を登場させ文壇の刷新を計ることは、ヂヤナリズムの任務である。

その時、新人に求められていたのは「**反逆**」である。荒木巍は「文芸時評」(『文芸』昭10・2)で、『既成作家に不満を持ち、行文整はざる若い作家に——いやむしろ行文整はないと云ふだけが魅力であるかの如き作家に、希望を維いだ』理由を、『新しい反逆精神、或ひは反逆精神の新しい面』に求めている。『純文学に新しい生命を吹込むためには、既成文学の伝統に対する異端者の働きに俟つほかはない』という愚老「速射砲 真の新人とは」(『報知新聞』昭10・6・21)で、『伝統の殻を抜け出したものこそ我々の期待する真の新人』だとされ、尾崎士郎「文芸時評」(『新潮』昭10・8)でも『今日の新人にとつて何よりも期待すべきことはおのれの情熱の動きに対して盲目になること』だとされたように、一様に新人に「**反逆**」が求められていく。「文芸の反逆」(『文芸』昭10・9)の川端康成も、『ユウトピア時代でない限り、文学の主流が反逆にない

といふことは考へられない」と断じており、翌年にも《既成作家の文学的世界に対する反逆的なものも上つて来てゐる》（愚亭「速射砲 新人を大に歓迎せよ」『報知新聞』昭11・8・15）という言葉が確認できる。その一方、次のXYZ「スポット・ライト」〔『新潮』昭10・7〕のような厳しい見方もあった。

今日の文壇は、新人を迎へることに汲々としてゐると言つても、過言ではないやうな状態だし、また、新進作家として現はれる人々も多いのである。／＼それにもかかはらず、疲弊してゐる純文学に新しい息を吹き込むやうな作家や、新しい文学の価値を創造するやうな作品は、一つも現はれないのである。

ここで重要なのは、作品個々の成否より、右のような印象が当時新人にさしむけられ、言表されていたことである。さらに、《ジャーナリズムは文学の打開と、稿料低下のために遠慮なく新人を生産した》、と豊田三郎「新人は自殺するか」〔『三田文学』昭11・4〕が指摘する問題もある。青野季吉が「ジャーナリズムと新人」〔『帝国大学新聞』昭10・2・21〕で批判するように、《ジャーナリズムは新人の作品を求めてゐる》が、そこでの基準は《文学的価値と文学的意義》よりも《即刻的の商品性》なのだ。

しかもこの時期の同人雑誌は、その掲載作が芥川賞（候補）に成り得るがゆゑに加熱していた。可能性としては《どんな雑誌に書くものでも読んでもらへ》・《世に出られる》以上、《同人雑誌による人々のい、時代》（無署名「六号雑誌」『三田文学』昭10・1）にはちがいない。《近頃は新人の出現に対するいろいろの表彰法の計画を見るが、それが着実な実力がありながら文壇的にまだ恵まれぬ新人を圧迫する結果にならないやうにと私は希つてゐる》という片岡鉄平は「文壇的漫歩」〔4〕同人雑誌其他〔『報知新聞』昭10・4・

25）で、《芥川賞などについても、選択の範囲を『日歴』や『世紀』の同人にまで拡げるのが当然》・《相当ながい間の信用の根柢を持つた人の力作を選ぶのが、表彰の意義を確実に保証する》と同人雑誌作家を後押しする発言をしている。《都下発行の文芸雑誌四五三、同人雑誌三七九、計八三三で、雑誌全体の二割を占めてゐる》・《最近は芥川賞に刺戟されてか、特に同人雑誌が多くなつた》（無署名「五行言」『文芸』昭10・11）という現象は、大江賢次が「党派性について——主として同人雑誌——（上）」〔『国民新聞』昭10・12・21〕で《明治文壇以降、現代ほど同人雑誌が多く出たことはない》というほどで、翌年になつても、《同人雑誌が出る。いくらでも出る》（近藤一郎「同人雑誌作家群」『新潮』昭11・7）という状況がつづいていく。

こうした動きは新人の作風にも影響を及ぼし、芥川賞の弊害がささやかればじめてもいく。鳳天「蝸牛の視角 文壇調とクラシック」〔『東京日日新聞』昭11・7・10〕をみてみよう。

新進と称せられる作家達や、同人雑誌にたてこもつてゐる人達の小説を読んで見ると、そこには互に共通した、一種の調子を感じられる。いづれも小器用で、末梢的で、左顧右眄的で、技巧的で、熱情と馬鹿々々しさが欠けてゐるのだ。これはジエネレーションといふ以上に、現代の「文壇調」ともいふべきものであると思ふ。

こうした批判に加え、端的に《芥川賞その他の新人のための文学賞が設定されて以来の傾向であるが、同人雑誌の新人といふものは、まるで詮衡委員といふ先生に作文を提出する中学生よろしくといふ恰好》（悪鬼子「大波小波 新人とは何か」『都新聞』昭11・7・25）だといふ揶揄もあらわれる。こと芥川賞に関しては、以前から

《材料で人の興味をひくのは、文学として邪道に相違ないが、変わった材料を求めて、それを彼の文学出発の足場とするのは、新進作家にとつて確かに有利な道》(潮鳴彦「壁評論 新進作家と新材料」『読売新聞』昭10・2・27)などと注目を集めていた題材が焦点となつていく。唾鳴蟬蔵「大波小波 第二回芥川賞」(『都新聞』昭11・8・24)で、《偶然の結果ではあらうが、石川の「蒼氓」がブラジル移民船に、「コシヤマイン記」がアイヌに、「城外」が支那に、それぞれ取材してあることは、ジャーナリズムが無意識の裡に素材の拡大に努めてゐる》証左だと指摘されるように、題材偏重傾向は明らかだった。確かに芥川賞は、『コシヤマイン記』にしても「城外」にしても、もし芥川賞がなかつたら、作者をとりまく特殊な雰囲気を乗り越えて衆目的になるやうな機会に恵まれることは困難であつた」と尾崎士郎が「芥川賞について」(『東京日日新聞』昭11・8・26)で述べる功績を、鶴田知也や小田嶽夫には果たした。また、菊池寛も《自分などは、普段は同人雑誌など、てんで振り向いて見ないが、かう云ふ機会(芥川賞/引用者注)に新進作家の作品に、目を通し得ることは、たいへんいゝ事だ》と「話の屑籠」(『文芸春秋』昭11・9)で述べている。しかし、『芥川賞とは限らず、懸賞小説の殆んど全部が、異国的な材料が特ダネ的な材料に限られる』(M「公論私論」『早稲田文学』昭11・10)傾向は顕著だった。《同人雑誌のなかには、芥川賞候補予選の時期を特にねらつて候補的作品を発表するといった奇怪な術策が行はれてゐる》と指摘する高見順は、「文学賞小論」(『改造』昭12・2)で《立派な作品を書くことと、立派な作品が表彰せられることとは明らかに切り離さねばならぬ》と警告を発している。こうした状況は、次のXYZ「スポット・ライト」(『新潮』昭10・9)に描かれる。

既成作家の無力を非難する人々があるかと思ふと、新人が無制限に、ジャーナリズムの舞台に採用されるのを、厳選主義にすべきであると、主張する人々もある。文壇は、今や標準を失つて「略」各人各説で、混乱を極めてゐる。「略」内容が貧弱だとか、表現の技術が幼稚だとか、そんな点では、既成作家の作品とは、とても比べものにならないかも知れないが、「新しさの魅力」といふ点では、既成作家の作品がもたないものを、新人の作品は、持つてゐるはずだと思ふ。

実際、竹下源之介「学芸サロン 「新人無能」誰の罪ぞ」(『中外商業新報』昭10・8・16)からは《真に力ある無名新人を要望するなら、時にエラーは覚悟で、不敵な野心的な新人を推輓す可し》という声もあがるが、周囲の期待どおり「反逆」を掲げた個性的な新人がすぐに登場するわけもない。むしろ逆に、矢崎弾「新人作家の現状」(『新潮』昭11・2)では《最近の新人をいへば手堅く、大人っぽく、ひと通り分別くさい常識のうへに足をからませてる》とされ、《二十代から三十代へ新人の年齢が移動したこと》がその要因とされるが、《惜しいことに年齢の積んだ時代の一般常識だけが作品に苔を生やして、リアリティが曇つてきた》と否定的な効果が批判されている。「同人雑誌の現状」(『新潮』昭11・4)でも矢崎弾は、《今日の同人雑誌一般に流れる大人びた理解や観察力の半面に、無名青年作家の気魄の老衰と、文学の不幸を暗示する文学青年の落魄の感情》を看取している。

では、こうした「反逆」への期待とその欠如への批判は、新人(の立場)にはどう映つていたのだろうか。《反逆の精神を喪つて、文学が成立しないこと、反逆の精神なくして青春といふものがあり得ないこと、それは旧人に教へられるまでもない》という「文芸時

評(一)新人の場合(上)」「『都新聞』昭10・9・28)の中村地平は、不用意な新人批判を牽制しつつ、次のように世代論を展開する。

僕たちは、旧い時代の何れの部分に、如何なる方法で反逆し
たらいのであらうか。否、僕らの「何」を以て、反逆したら
いいのであらうか。旧時代の生活や文学に莫々たる不満やアナ
キスチックな反抗を感じるに熾烈でありながら、然も、自ら
の姿を顧みたま時、それは将に手ぶら以外の何物でもないといふ
のが新人の実状である。

この言表自体、やはり新人である太宰治擁護の文脈から示された
ものだが、同世代実作者からも同様の声があがっていく。《およそ
今日ほど所謂文壇の新人の多いこと、また同人雑誌のおびたゞしい
ことはまれにみる所であらう》と現状認識を示す「新人論異議あり
最近文壇論議②」(『時事新報』昭11・2・4)の福田清人も、新
人への不当な風当たりに対して、次のように憤っている。

僕等と同じ時代——年齢からいつて三十前後のもの、三、四
十人はあるだらう。／＼これらをひつくるめて、むちうつに結局
大同小異だとか、表現がまづいととか、その傾向を分析してデカ
ダンス的だとか、自嘲的だとか、積極的な意欲がないとか、明
確な世界観を把握してゐないとか、自己の掘りさがが不足する
とか、まことにうるさいことである。なるほどそれは一応うな
づけるものがある。／＼しかしこれはいつたい僕たち若い作家の
みが受けねばならぬ鞭であらうか。

つづく「新人の反抗 最近文壇論議③」(『時事新報』昭11・2・
5)では《若いゼネレーションはおたがひの共感する生々しい時代
感によつて、横につながり、この既成的なる生ぬるい地帯に反撥す
る気魄と、それにふさはしい作品をぶつつけねばならない》と、世

代固有の《時代感》を掲げていく。福田よりは中村に近い田村泰
次郎は、《新人論》は文壇の流行》だ判じた上で、「新人の立場
(上)」(『国民新聞』昭11・3・25)で世代の内実を語っていく。

現在二十代、乃至三十歳前後の年齢にある人々が、その最も
多感な時期をどういふ環境に取りまかれて過ぎて来たかといへ
ば、大学に於けるマルクス主義の奔騰の状態を先づ考へねばな
るまい。現存の社会機構を暗く認識する確実な方法を授けられ
たと、同時に、半面に於いて我々が得たものは、全く何処の誰
が発したとも知れない幽霊のやうな指令によつて、極端に我我
の個性の自由といふものを圧迫することであつた。「略」しか
しながら思想がまだその実践の成果の上に何らかの可能性が
かけ得られる間はそこに希望とまではいへなくとも何か明るいも
のが存在し得た。それが完全に実行の道を封じられたとき、青
年はもう何を目当に生きればいゝのか、——一つの時代に於い
て、理想を指す一つの思想の退潮期といふものが、どんなに
陰惨で、暗い絶望に満ちたものであるか、骨身に徹して体得さ
せられたのが我々である。

「新人の立場(下)」(『国民新聞』昭11・3・28)で田村は、《今
日では我々は昔の作家たちがそれぞ自分の個性の特異性の上に立っ
てゐたと違つて、時代とか社会とかいふものの上に自分の立脚点
を定めてゐる》ことが《我々の考へ方なり見方を、誰も彼もどこか
で非常に似通つてゐるやうにしてゐる》のだと述べている。

そこで、こうした新人の「類似性」とその基底を成す主体形成期
の歴史的要因をめぐる言表を検討していきたいのだが、それに先だ
ち、本多顕彰「新人と若さ 新人の今年と来年(一)」(『都新聞』昭
11・12・23)における、《新人といふもの、定義》が《曖昧になり

勝ち》だという次の問題提起を經由しておきたい。

現在の文壇についてみても、年齢の若さと、出現の新しさと、仕事の新味と、以上三つの点から新人といふものが考へられてゐるやうであり、しかも、その三つの見方は必ずしも截然と区別されてゐず、論者はその間を行きつ戻りつしつ、新人論を立て、ゐる場合があるからである。

本稿が注目する昭和一〇年当時についていえば、第一に新人の《出現の新しさ》(露出量や文学賞の効果)があり、その上で《仕事の新味》(の有無)が取り沙汰され、《年齢の若さ》という共通項が前景化されていった。そのことは、以下の作品評にもみられる。

《知識人の敗北の相はここ数年來の現代小説の一原型かとも思はれる位に夥しく描かれてゐる》という太田咲太郎「文芸時評」(『三田文学』昭10・6)の評言は、否定的に捉え直せば《近頃の青年作家の小説には、あらずもがなの渋面と苦惱面とが、まるでそれがなければ落第とでもいふやうに、取つてつけたやうに附け加へられてゐる》ことを《時勢に媚びる卑しさ》と難じた無署名「文壇寸評」(『改造』昭10・8)の批判にかわる。武田麟太郎も「文芸時評(6)新人の共通点」(『報知新聞』昭10・8・26)で、大江賢次「破廉恥」・蔵原伸二郎「石隠居士」・太宰治「猿ヶ島」・中村地平「失踪」・井上友一郎「反対党」を例示し、《作風表現、仮託人物の外見上著しい相違にも係はらず、根柢において一致してゐるものを感じ》とり、それを《この時代の、作家が属してゐる知識層のほとんど絶望に近い困迷》とみている。同様の印象を、「文芸時評」(『新潮』昭10・11)の岡田三郎は《いまだ嘗て、今日の新人ほどに暗い影をともなつて文壇に登場した新人はない》と変奏してみせる。翌一一年にはいっても、《最近のジャーナリズムを賑している新人作

家の作品を読むと、其の読後感の中でいつも僕は作家の持つ青春といふことを考へないことがない》という「彷徨へる青春の倫理」(『文芸首都』昭11・4)の杉本欽一が、《もう其処には、個性の激しさなどは感じられない。いづれも同じやうな表情で、一つの功利的な諦観の底に、青白く沈潜してゐる姿だけ》だと述べている。ただし、杉本はそれを《一つの時代的必然の上に現はれる時代的特色》と捉え、《今日の文学、特に新に台頭した新人文学の意義は、かかる歴史の流れに胚胎せるデカダンスのかもしれない出ず雰囲気的美にある》と肯定的に意味づけている。このような新人世代の「類似点」として見出される印象を、文学の根柢として明確に打ち出していったのは「後退する意識過剰——日本浪漫派」について——(『コギト』昭10・1)の保田與重郎である。

世代的に云つても僕らの青年の経歴の主なる時期は、一九二〇年代の末から三〇年代の始めにまたがる。かつて僕らの日本の過去に於て、かやうなはげしい時代の青春を経験した青年の時代はないのだ。(略)この狂爛の時代を、一番傷きやすい年齢に於て感じ、一番痛みやすい時代の心情を以て生きてきた人間の文学を、僕らは今後始めねばならぬ。

田村が負荷と感じた右の諸条件を、保田はきわめて肯定的に捉え直してみせたのだ。こうして「反逆」が求められた昭和一〇年前後の新人には、逆に歴史的な条件下での主体形成を余儀なくされた世代の固有性が見出され、その「類似性」ゆえに新人は個別性よりも層として扱われていく。しかも、こうした動向と連動するように、「新人創作特輯」(『行動』昭10・3)や「新人推薦号」(『文学評論』昭10・6臨時増刊号)、「新人創作号」(『早稲田文学』昭10・8)といった特集が組まれてもいく。ここでは、ひろく話題となった二つ

の新人特集をとりあげたい。

一つは、新人特集と銘打たれてはいないものの、第一回芥川賞候補(落選)作家の新作四編を集めた『文芸春秋』昭和一〇年一〇月号の創作欄である。同誌同号には、高見順「起承轉々」、太宰治「ダス・ゲマイネ」、衣巻省三「黄昏学校」、外村繁「春秋」が掲載され、新人のサンプルとして大きな注目を浴びていく。ここでも、葛飾老人が「文芸賞を繞る人々(5)四人の新進」(『東京日日新聞』昭和10・8・25)で、《芥川賞の噂にのぼつた人々は、深淺の別はあるが、その大半が、一度はマルクス主義の洗礼を及び、乃至はプロレタリア文学の影響を受けたものであることが眼につく》と指摘するように、その共通する世代の特徴が作品評価に大きく関わっていく。同誌同号を《たいへん興味のある趣向なので真先に読んでみた》という「文芸時評【1】冬眠する新人」(『報知新聞』昭和10・9・23)の矢崎弾は、《最近の新人には技術への巧緻は見えても、烈々と燃えさかる野心と情熱は萎縮してゐる》・《驕然たる世相から逃亡を企てたとも思はれる洞窟のなかで現実をすき勝手にあそんでゐるむきが多い》と評した。《『文芸春秋』所掲の四篇は、とりどりに愉快だった》と述べる新居格は「文芸時評(3)「文・春」の新人作」(『東京日日新聞』昭和10・9・25)で、《これら新人の三篇(黄昏学校を別にして)を通じて感ずることは、彼等が彼等の生活(学校を出てさう長くない)らしい生活に躑躅してゐて、社会機構の投線がないことと、探求的なものが感ぜられないといふこと》だと、否定的に評価していく。いずれの論者も、そこに読みとつたのは《行き詰つた現代青年の頹廢の記録》(海野武二「十月創作評 青年の頹廢の記録——『文芸春秋』の巻——」『時事新報』昭和10・9・25)にはちがいないのだが、手放しの讃辞をおくつたのは「時評

【5】パンドラの箱 新人応援歌」(『読売新聞』昭和10・9・26)の林房雄くらいであった。《パンドラの箱》をあけたパンドラのやうに、驚かされた」という林は、《蓋をあけて見たら、石川達三、それから、高見順、太宰治、外村繁、衣巻省三といふ若い化物どもがとびだしてきた》と、新人の個性を積極的に評価し、《現状打破が、若い人物によつて企てられる》ことを、自ら提唱する《浪漫主義》の文脈へととりこんでいく。逆に、林の評価点を厳しく批判した竹亭「芸学サロン 不真面目が取柄の新人」(『中外商業新報』昭和10・20)では、《芥川賞候補の新人の作品を通じて最も唾棄すべきことは、概して作家の態度の不真面目で取材の稚拙極まること殊に前二作(起承轉々)「ダス・ゲマイネ」／引用者注)において然り》と酷評されている。

やはり議論を呼んだ「新人傑作集」(『中央公論』昭和10・12)もみておこう。ここには、高見順「私生児」、大鹿卓「火薬」、外村繁「血と血」、大谷藤子「血縁」が掲載される。高見、外村は『文芸春秋』につづいての登場で、ジャーナリズムの関心のありかもうかがえる。《今月は丁度中央公論が新人傑作集と題して、その創作欄全部を高見順、大鹿卓、外村繁、大谷藤子の四氏に明渡してゐるが、うち見た所三十代或はそれに近い人達許り》と、書き手の年齢に注目する河上徹太郎は「文芸時評 新人の技巧没入について」(『帝國大学新聞』昭和10・11・25)で、《彼等は若くして新人であるには、余り小説がうま過ぎ、人間が利口過ぎる》ことのデメリットを《今の新人は世間をなめてかゝる。或は嘲笑してかゝり、ふざけてかゝる。然しその背後に自分の姿もなければ自分の世間の姿もない》と指摘する¹⁸⁾。『文芸春秋』四作への評言にもみえるこの指摘は、もちろん新人全体への批評でもあるだろう。《チャアナリズムが新人を

優遇する傾向はいはゆる文芸復興の呼び声の上つて以来顕著」だとその動向を言祝ぐ杉山平助は、しかし「文芸時評(3)新人について」(『東京朝日新聞』昭10・11・30)で、『四篇ともことごとく、肉親間の愛慾、或は嫉妬を内容としてゐる偶然の一致』に注目した上で『作品の基調は、おほむね感傷的なデカダンスであり絶望的な時代の空気を反映して陰鬱であるが、単にこれを詠嘆し、或は叙述するにとどまり、その間に閃く飛躍的な知的冒険の一抹をすら、見出し難きを寂寥とする』と難じる。ここでも、世代的特徴が看取された上で、新しさを含め、新人に求めるものの欠如が否定の根拠となつてゐる。これを遠慮なしに言えば、『己に対する必然の要求から出た制作精神の荘嚴さは、どの作品からも感じられなかつた』(海野武二「十二月創作評 不可解な新人達」中央公論)の巻(下)——『時事新報』昭10・11・30)、あるいは、『新人の創作四篇、旧人の世界の延長に過ぎません。どれも何らの新しい視角なしに古い血の問題を取扱つてゐます』(問答子「豆戦艦 十二月の雑誌」『東京朝日新聞』昭10・12・2)といった全否定に近い評となるだろう。自身新人である島木健作は「血の問題」に就て「一〇三三(『時事新報』昭10・12・13)15)で『最近の新人作家の作品にあらはれた一つの傾向』である『血の問題』をとりあげ、それを『マルクス主義の敗退によつて特徴づけられる、暗い反動の時代』という前提から意味づけていく。曰く、『敗北の原因』が『外の世界から内に向けられたとき』、『血の問題』が見出された、しかし『血』は重要なモメントではあるが、事柄の根本ではない、『思想人の敗北を来たらしめた真の原因は、やはり終局に於ては、おのれの内部にはなく、外部にあつた』。逆に島木は、『この国の特殊な、日本の現実といはれるもののか』に、マルクス主義が思想的に敗

北した原因があると言明している。その意味で、新人の描く『血の問題』は、歴史的條件が生み出したものであると同時に反動でもあり、換言すれば、新しさであると同時に逆説的な古さの表徴でもあるという。

ここで、右の二特集も含めた、昭和一〇年前後の新人を表表する際の特徴をまとめておこう。まず、新人への注目は作家個々人というより、層としての新人への興味として言表されていく。そのことと連動して、新人作品には差異よりも類似性が見出されることになり、新人の世代体験——主体形成期におけるマルクス主義の(悪)影響——が繰り返し指摘されていく。こうした要素と新人作品を有機的に結びつけて読もうとする批評態度はほとんどみられず、そうした言明は当の新人から発されていく。逆にいえば、わかりやすい新しさや反逆をまとつていない、それでいて暗鬱とした世代固有の作風をもつ新人作品に対して、周囲はうまく意味/位置づけができずに、それゆえ、感情的に極端な評価を下すか、あるいは、旧来の文学基準に即して欠けてゐるものをあげつらつていくことになる。もちろん、新人の立場や動機、さらには新奇な文体・形式に対する理解が示されることはあつた。それでも、ジャーナリズム主導の新人登用とそれに拍車をかける芥川賞を代表とするイベント、既成文壇の価値観(評価軸)、世代体験を共通の基盤とする新人の文学、といった三項は、動機も理念もそれぞれ異にしたままに相互参照・批評を繰り返しながら、昭和一〇年前後の新人をめぐる言表は紡がれていった——

III

昭和一〇年前後、新人の檜舞台として機能した雑誌がある。昭和五年に創刊され、《当時、文学に志がありながら世に出られない人たちに温かい手をさしのべていたことで知られていた》²¹⁾とも回想される、小野松二編輯主任『作品』である。こと、五周年を迎えた昭和一〇年から翌一年にかけては、特集号を通じて精力的に新人の紹介に努めている。この間の特集名を、次に掲げておく。

- ① 「特輯 新進作家小説号」(昭10・7)
- ② 「特輯 続新進作家小説号」(昭10・8)
- ③ 「特輯 新進文芸評論家号」(昭10・7)
- ④ 「特輯 新進作家短篇集」(昭10・12)
- ⑤ 「特輯 新人コンクール」(昭11・1)
- ⑥ 「特輯 新人コンクール」²⁴⁾(昭11・2)

『作品』は、創刊以来フランス文学の翻訳を柱とした着実な成果を積み重ね、P・Q・R「同人雑誌展望」(『文芸通信』昭9・2)では《同人雑誌といふよりはもう一廉の文芸雑誌》だと位置づけられている。『作品』を《異色ある存在》だと評す岡田三郎も「同人雑誌とその作家達」(『新潮』昭9・7)で、《これも同人雑誌ではなからうが、新人の作品があるので、読むことにしてゐる》と評している。つまり『作品』とは、同人雑誌と商業雑誌を橋渡しする位置にあり、²⁵⁾実際、昭和一二年には芥川賞作家を誕生させてもいる。本節では、こうした特質をもつ『作品』の昭和一〇年の新人特集(小説)に照明をあてて、書き手の世代を意識しつつ、小説群に通過するモチーフを探っていきたい。

まずは、前記①・②・④掲載小説の概要をまとめておく。

第一弾「特輯 新進作家小説号」(昭10・7)には、一〇の短篇が並べられている。いちはやく注目した舟橋聖一は「文芸時評(5)新潮・作品の諸作」(『中外商業新報』昭10・6・29)で、《各作家とも、各々一特徴を具へ、人間の心持を描くことについては、実にうまいものだと感服せざるを得ないが、枚数が短いせるか、一篇の小説としての構成力や振幅が足りないのは、遺憾》²⁶⁾とした。浅見淵も「文芸時評(3)才気のサンプル」(『信濃毎日新聞』昭10・8・5)で、《何れも枚数がすくないので作者の才気のサンプルを見せられてゐるやうな気がし、その点では面白かつたが、これといつて感銘の深い作品は乏しかつた》と同様の見解を示している。

A 丹羽文雄 (一九〇四〜二〇〇五)・「達者な役者」

小説家の麒は、二年近く西銀座の酒場のマダム・昇子とつづいているが、はたからみるほど安穩としているわけではない。新聞記者・河崎と昇子との関係があやしいし、自身の小説にしても、現実をいかに描くかで深く思い悩んでいる。

麟は毎日にやうに昇子を解剖し、説明をつけ、区別してゐるのであるけれど、ちよつとした昇子の行動や言葉に出会ふと、そんな付度はいつべんにどこかへ消し飛んでしまふのだ。現実のなかでもこれだ、まして昇子を作品の上に表現する時、どんなに危険な断定を下してゐるか位は十分に承知してゐた。

こうした緊張の中、麒は昇子と河崎が関係する場面を目撃してしまい、「不安」や「淋しさ」に包まれる。他方、昇子は氣にとめた様子もなく、麟はその強さに打ちのめされていく。

B 外村繁 (一九〇二〜一九六二)・「神々しい馬鹿」

不況下の問屋で働く亮一は、つねづね「結核性の病氣」と「若い

店員達の女関係」を心にかけていた。番頭・惣太の「様子が少し変」だと気づいた亮一は、その理由が自身の姪・綾子への恋煩いだと知る。身分不相応であることを「注意」するが、惣太は聞く耳をもたない。その徹底した楽天主義に「神々しいまでに馬鹿だ！」と快哉を叫ぶが、惣太は「精神に異常を来して」しまふ。

◎中島直人（一九〇四～一九四〇）・「森の学校」

ホノルルにある日本人学校では、盆踊りの練習が行われていた。その喧噪に興味をもったアメリカ兵が、折々見物にくる。そんななか、「私」はちよっかいを出してくる守山一郎とのトラブルの果てに入院することになる。「私」が回復した頃、学校でおきた盗難事件の犯人が兵隊だと判明し、「奥さん」（先生）からは見舞いの手紙が届く。「私」はあさつての盆踊りに向けて退院する。

◎坂口安吾（一九〇六～一九五五）・「金談にからませる詩的要素の神秘性に就て」

しきりに「読者」に呼びかける「私」は、弁護士・椋原孔明が三千円の金策に奔走するさまを饒舌に語っていく。金策訪問、第一の相手には、大損をして「一日に五回ぐらゐの割合で自殺がしたくなるほど」だと断られ、それ以降も「要するに万事万端蹉跌」してしまふ。その後「かけがえのない人物」を思い出した椋原孔明は、手紙で金策を申し入れるが、返書にははぐらかすような内容しか書かれていなかった。その後の椋原孔明の消息は不明である。

◎丸岡明（一九〇七～一九六八）・「女の合唱」

看護婦の西尾藤江は、看護婦会の会長・しげと「不愉快な感情のいざこざ」を抱えているが、その主人と関係をもっている。しげの指示で夜中に駆けつけたS病院の急患者は、親に結婚を反対されて心中した男女だった。院内では「患者が妊娠しているかどうか」が

噂の中心になるが、藤江はその好奇のまなざしが自身にむけられたもののように感じる。患者の回復は藤江の気持ちをも明るくするが、一方で悪い「噂」も生々しく感じられるのだった。

◎寺崎浩（一九〇四～一九八〇）・「夜の祭礼」

株で派手な生活をしている鳥羽は、結婚とともにデパート店員となった。妻の綺子も結婚前までやっていた洋裁をやめて、家庭に入る。お互いに家庭を大事にするあまりかつての「華かさ」を求めることを怖れたのだが、変化のない日々で退屈と息苦しさ募っていく。ついには、鳥羽は株を、綺子は洋裁を再びはじめる。

◎小田巖夫（一九〇〇～一九七九）・「夢さめ」

五七歳になる刑務所の所長は、長年その職に安住してきたが、今「廿歳の青年の多感をとりのどし」、第七房の女囚に恋情を抱く。ある夜、所長は第七房の女囚と海辺でたむれる夢をみるが、徐々に平静を取り戻していく。地震の際、避難を呼びかけに行くと「何かたしなめるやうな瞳」でみられ、所長は「総身に寒気を覚え、われに返り、死にたい衝動に駆られる」。

◎田畑修一郎（一九〇三～一九四三）・「三宅島通信」

三宅島にきて半月たつ「僕」は、島の自然を紹介しつつ、自分が島にきたのは「この二年近くの間、間歇的に襲つて繰る不眠」に苦しめられたためでなく、次の事情によるという。

世の中には、あんまり健康すぎて、他人の考へた通りにしか考へることができず、他人の書いた風にしか書けない人間だつて沢山あるのだ。彼自身はどこにあるのだ。そして、彼自身とは一体何者であるか。それなら僕自身はどうか。僕は僕自身を見失ってしまった。それから、僕を支へてゐた外的なものも同時に見失つてしまったやうな気がする。

そんなことを考えながら、「僕」は島の人々と過すごしていく。

【太宰治（一九〇九〜一九四八）・「玩具（雀）」】

前半は、「私」が「この玩具といふ題目の小説」を書こうとして「姿勢の完璧を示さうか、情念の模範を示さうか」悩みながら、自身の「赤児の思ひ出話」を綴つづっていくメタ・フィクション。後半は「井伏鱒二へ。津軽の言葉で。」というエピグラフ通り、全編津軽弁で、二組に別れた童児が雀に擬えた子とり遊びに興じていく。

【川崎長太郎（一九〇一〜一九八五）・「喫茶店」】

喫茶店時代を迎えた観のある銀座を舞台に、「文学志望」にして「童貞青年」である根上とその友人・村木は、街を歩き、恋をしている。スペイン茶房のレコード係・堀川のり子をみそめた打木は、根上を介して恋文を手渡してもらうが、その封筒はぞんざいに箱に投げこまれてしまう。

※

第二弾「特輯 続新進作家小説号」（昭10・8）は、無署名「消息」（『都新聞』昭10・6・15）でも▲『作品 七月号新進作家小説号、丹羽、外村、坂口、田畑、丸岡、中島、喜崎、太宰、小田川崎』と情報発信されており、短編八編が掲載される。

【石川淳（一九八九〜一九八七）・「貧窮問答」】

聞き手を想定した饒舌体によって、自身の身辺を語りはじめる「わたし」だが、翻訳の仕事が「二百両にはならう」と口にして以来、同宿の大庭五郎と河原十介をはじめ、周囲の人々がその金目当てに近づいてくる。翻訳もそこそこに金策に奔走する「わたし」だが、その実、騙だまされていた上に、靴の中の金までとられていた。

【仲町貞子（一九九四〜一九六六）・「蒲原先生の話」】

「豚先生」というニックネームをもつ蒲原先生は、祖母との二人

暮らしで、その祖母に月給袋をそのまま渡しているため金がない。

ある日、母が朝鮮からくることになり蒲原先生は喜ぶが、帰鮮した後は「憂鬱」にふさぎ、職務にも支障を来し、便所に金を落としてしまう。学校の記念日に、蒲原先生も仮装すると聞き及んだ祖母は、校長に「河原乞食の真似」はできないと談判しに行く。

【大鹿卓（一九九八〜一九五九）・「慾望」】

「蕃社全体が熱つばい興奮に憑かれてしまった」という状況の中、台湾で通事の荘有水が、私欲のために銃弾に倒れるまでの物語。

【浅見淵（一九九九〜一九七三）・「赫い夕日」】

尋常三年・昌吉の一家は、前年の春に朝鮮に移ってきた。昌吉には、父や雑用係の松木がいう朝鮮人の怖ろしさが実感できない。ある時、従兄と父の下役の息子と連れだつて洛東江に蜆拾い蜆に出かけた。その時は、朝鮮人部落もトラブルなく通つたが、翌年、「二枚の刷物」（韓国皇帝退位文・朝鮮総督の論告文）をみた際、「今まで昌吉の眼には穏やかに見えてゐた鮮人の風貌の裏に、何か不気味な激しい感情が潜んでゐるやうに思はれて来た」。

【井上友一郎（一九〇九〜一九九七）・「李鳳麟」】

「私」は、久しぶりで台湾籍の李鳳麟と再会する。大学時代の友人・李鳳麟は「ある期間日本のどの青年の心をも囚へきつた、あの一九二〇年代の終り頃の情熱に、やはり妖しく取り憑かれてゐた」。また、「美しいブルジョアの娘」袖子に惹かれてもいて、その矛盾に苦しんでいた。再会した翌日、李鳳麟をは円タク只のりの罪で捕らえられる。「私」が神楽坂署にひきとりにいくが、一箇月後、新聞で李鳳麟が金銭強要で検挙されたことを知る。

【古木鐵太郎（一九九四〜一九五四）・「ある男の話」】

「僕」はT子と結婚して一月になる。T子は前に一年ばかりで死

んだ子供のことを口にする。T子はその父親が誰かは問わず、「僕」もきく気にはなれない。その間、T子の幼友達だというC夫婦・S夫婦との交際もはじまっていくが、ある晩、「曾ての過失の相手」はCだと告げられる。それでも「僕」はそれほど動揺しなかった。

〔Q〕逸見廣（一九九九〜一九七二）・「面会」

麻布の三連隊に入営している友人・千葉清造から、面会にきてほしいというはがきが届き、「僕」は飼葉をもって会いに行く。「一種の放浪癖」がある千葉と、就職した「僕」とは旧交を温める。

〔R〕植村敏夫（一九〇八〜一九九五）・「柳子」

朝鮮人留学生の趙君に誘われるままに学校を休み「私」は温泉にきた。話題の中心はカフェ「リラ」の柳子で、二人ともその魅力に囚われている。一度は距離をおこうと思った趙君だが、今度は「僕」に結婚の仲立ちをしてほしいという。交渉が不首尾におわり、趙君は次々とトラブルを起こしていく。趙君が「敢然に柳子を掠奪」していたとき、「僕」は趙君にも柳子にも愛想をつかさ。噂では、柳子はしばしば狂言自殺を企てたという。

※

《▲「作品」十二月号 特輯「新進作家短篇集」号とする》と無署名「よみうり抄」〔読売新聞〕昭10・11・10〕で宣伝されたのが、第三弾「特輯 新進作家短篇集」（昭10・12）である。執筆者は六人と少なく、小説自体も短いものが多くなっている。

〔S〕伊藤整（一九〇五〜一九六九）・「石狩の宿」

「お葉の男を知った身体を見てゐることに耐へられなくなつて、それから逃げ出す」ため、「私」は故郷の石狩に旅行にきた。幼馴染の歌子の顔でも「ちらと見たい」と考えながら、「私」は侘びしい風景をみては、「胸のなかの空虚さ」を感じている。

〔T〕坂口安吾「をみな」

母を「あの女」と呼び、いじめられた記憶しかない「私」は、しかし「好きな女が、近ごろになつてふと気がつく」と、みんな母に似てる」ことに思い至る。そこから、「女」や「愛」について思いをめぐらせ語っていくエッセイ風の小説だが、結末でそれが「小説の種にとんだ苦勞」をしたゆえの苦肉の策だったと明かされる。

〔U〕浅見淵「秋日和」

Sに誘われた「自分」は鎌倉に出かけ、円覚寺、建長寺、八幡宮を見物してまわる。夕食にはいった掛茶屋の仲居と話しこみ、大阪の話題でもりあがる。大船で別れたSは、一人帰阪の途についてた。

〔V〕今日出海（一九〇三〜一九八四）・「三枚目」

M監督に見出された「鍛冶屋の若い男」、宮本宗助は次第に珍重されだす。その後M監督は去るが、「撮影所の名物男」として活躍をつづけ紳士らしくなっていく。そのせいで「容貌風采が役柄に適せず」として誡首された宮本は、靴磨きへと職を転じる。

〔W〕小田嶽夫「窮死」

F君に知らされ、「私」は病床の末子を見舞う。末子は、故郷で「初恋の破局、親の強ひた結婚、出奔、女給」、さらには若い画家と恋をし、男は妻子を捨て子をなすが、やがて行方をくらましていた。残された子も突如肺炎で失い「痴呆」のようになり、今は養病院のベッドにいる。末子が助かることを切に願う「私」だが、翌朝、末子は骸になつていた。

〔X〕木村正治（未詳）・「橋の下」

河原で「野良犬の生活」をしている久平は、「故里」も忘れ、「一思ひに首を吊つて死ぬことも出来」ず、その生活に「安息」を見出していく。駆け落ちする男女の会話をさき、「或る感動」に打たれ

若さに憧憬を覚えるが、やはり久平は婆さんの檻樓にもぐりこむ。³⁵⁾

※

ここで、三特集、計二六編の小説群がゆるやかに共有していたモチーフをまとめておきたい。第一に、朝鮮やハワイといった外地、あるいは三宅島や刑務所などまで含め、初期芥川賞の傾向と重なる**目新しい題材**があげられる〔C・G・L・M・N・O・Q・R・V・X〕。それと関連して第二に、方言の使用や外地からみた日本といったものも含め**故郷**があげられる〔C・I・N・O・R・S・T・W・X〕。第三に、三角関係、執念深い片思いや嫉妬など、**ゆがんだ不安定な男女関係**もよく描かれた〔A・C・F・G・J・K・P・R・S・T・W・X〕。また、第四として、恋愛を原因としたものから人生の行きづまりまで、**死(自殺・心中)**もとりあげられることが多い〔E・I・M・T・W・X〕。第五に、借金や金策奔走など**貧窮**に関するものを中心に、**お金**がプロットの要とされた作品も散見される〔D・K・O・V・X〕。時代の表徴としてこれまでも指摘の多いものとしては、第六に**自我の不安・自意識過剰**があり〔A・G・H・L・O・S・W〕、第七に**スタイル**としての**饒舌(体)**があげられる〔D・I・K・T〕。それと関連しつつ、第八として、**文学や書くことをめぐる思索・逡巡**も、この時期の新人小説によくみられるモチーフである〔A・I・J・K・T〕。

総じて、個々の作品をみたかぎりにおいてはそれほど目立たないそれぞれのモチーフは、新人の作品群をそれとして一挙にみわたすならば、そこにはやはり差異よりも**類似性**が顕著である。ただし、こうした様相は、個性の欠如として性急に批判すべきものではなく、新人それぞれの文学観や立場がありながらも、一度小説を書けば、同世代他作家とモチーフが類似してしまうほどに、世代体験

が深く刻印されていることに注目すべきである。

このように、あたかも小説のモチーフを共有したかのような新人たちは、文芸復興期にはいつてから、徐々にその地位を層として浮上させてもきた。そのことは、NGS「同人雑誌作家論」(『文芸通信』昭8・11)と右にレビューしてきた新人特集への寄稿者を比較するとわかる。《二度晴の舞台に登場した人々、或ひはまさに登場せんとする人々》という条件下で「同人雑誌作家論」に紹介されたのは、蔵原伸二郎、古木鐵太郎、中谷存雄、田畑修一郎、寺崎浩、川崎長太郎、緒方嶮、岡村政司、那須辰造、小田嶽夫、青柳瑞穂、外村茂、上林暁、浅見淵、尾崎一雄、丹羽文雄、丸岡明、庄野誠一、石坂洋次郎、中村地平、三原達夫、大鹿堯、神戸雄一、木山捷平、太宰治、仲町貞子、中里恆子、神西清、柳原利次、加藤千代三、浜本善矩の三十一名であった。このうち、実に二一名(傍線)が昭和一〇年の『作品』誌上の新人特集に名を連ねており、この年『作品』に寄稿した作家となればさらに五名を加えた総計一六名が、『作品』という檜舞台にたどりついたことになる。ここに、昭和一〇年前後の新人にとっての『作品』の重要性は明らかである。

IV

第四回芥川賞は、石川淳「普賢」(『作品』昭11・6〜9)と富澤有為男「地中海」(『東陽』昭11・8)の二作同時受賞となった。本稿で注目する石川淳は、受賞直後の無署名「垣のうちそと 芥川賞決定」(『都新聞』昭12・2・11)で次のように紹介される。

石川淳はかねて仏文学に造詣深く、ジイドの「狭き門」その他幾多の翻訳がある、谷川徹三の友人とか云はれてゐるから、も

う四十歳くらゐの苦勞人、授賞作の「普賢」は雑誌「作品」昨年六月から九月まで連載、夙に一部ではその才能を認められてゐた

単に年齢ということばかりでなく、翻訳や小説によつて、石川淳のキャリアは知る人ぞ知るものであったようだ。ここで、石川淳の処女作から芥川賞受賞作までの小説一覽を掲げておこう。

「佳人」〔作品〕昭10・5)

「貧窮問答」〔作品〕昭10・8)

「葦手」〔作品〕昭10・10～12)

「山桜」〔文芸汎論〕昭11・1)

「秘仏」〔作品〕昭11・4)

「衣裳」〔文芸汎論〕昭11・5)

「普賢」〔作品〕昭11・6～9)

この間、「作品」に発表された石川淳の小説は、芥川賞受賞前から一部で注目されてきた。「月評1記憶される文芸諸作品」〔読売新聞〕昭10・4・26)で《おそらく過去を通じてこれほど新作家の優遇された時代は絶無であつたかの觀であり、品質だつて非常に劣つてゐるとは思はれなかつた》と述べた牧野信一は、つづく「月評2新人の佳作、凡作」〔読売新聞〕昭10・4・27)で、《今月こゝまで読んだもの、うちで、おそらく多くの文芸愛好家が見落しはなないであらうかとおもつた佳作に出遭つたことを吹聴して置きたい》と前置きした上で、石川淳「佳人」を《不思議な魅力に富んだ美しい力作》と激賞している。寺崎浩「普遍的な感情」〔文芸通信〕昭10・6)では、《「作品」の石川淳氏の作(「佳人」/引用者注)は始めてであるが流石、チツドの名訳者としての風貌を見ることが出来る》と、訳業との連続性からその創作が評価されてもいた。また、

鹽田良平「文芸時評(2)作家の潔癖性」〔都新聞〕昭11・5・31)で《饒舌の甚しいもの》と評された「普賢」は、谷川徹三「文芸時評(5)風変りな新鮮さ」〔東京朝日新聞〕昭11・7・30)で次のように論じられた。

「作品」にこの六月以来連載されてゐる石川淳氏の「普賢」は面白いものである。以前やはりこの雑誌で中篇「葦手」を読んだが、この二作だけでもこの作者が今日の新進の水準を抜いてゐることは明かに見てとれる。

こうした、芥川賞受賞以前の石川淳への注目・評価は、「普賢」への選評「芥川龍之介賞経緯」〔文芸春秋〕昭12・3)でも目立つた特徴の一つである。佐藤春夫が《「普賢」の逞しくて高い文学精神、「地中海」の本格的でしかも清新な趣のある作風、どちらが当選しても不足はないが、同時にどちらかを捨てるだけの気持にもなれない》と述べたように、第四回芥川賞は作風の異なる二作品の受賞となつた。《「普賢」を読む暇がなくてまだ見てゐない》という横光利一は、《しかし、この作者の作品は前にいくつも愛読したことがあつた》として《作家としての手腕の立派に充実してゐる人》だと評している。やはり《石川淳氏の作品は以前に貧窮問答や葦手など読んだ》という滝井孝作は、《手綺麗な美しいお話風の作品で洒落たやうな点が弱々しい》と感じていたが、《普賢は、以前の作のやうな弱々しい所がなくなつて、持前の饒舌の筆の上に凶太く根を据ゑた》と評価して、《この作者の成長に先づ感心した》という。《混沌としたものの不思議な魅力に満ち満ちてゐる》と評した小島政二郎、《不思議な宿命的な感覚からこの作品を絶対に支持することに決心した》という室生犀星、ともに「普賢」を絶賛している。《第一に石川淳氏を推す》という佐々木茂索も、《「貧窮問答」「葦

手」と書いて来て「普賢」に來た石川氏に授与する事は甚だ妥当である」と、『作品』を舞台に積み重ねてきたキャリアを含め「普賢」による石川淳への芥川賞授賞を《妥当》だとしている。

この受賞をうけて、石川淳「普賢」はひろく批評の対象となっていく。杉山平助は「文芸時評(3)性格破産者の群」(『東京朝日新聞』昭12・3・1)で、《饒舌で、およそ読みづらいものであつた》とした上で、《左翼的な人物或は事件を点描》した点にしか《大正初期の作品と異なる痕跡》が見出せなかつたという。同様に「普賢」に「新しさ」を看取できなかったのは「文壇の聳棧敷から(一)」(『東京日日新聞』昭12・3・12)の森田草平で、《近頃は身辺小説もこんな所まで來てゐるのかなと、感嘆これを久しうした》。《身辺小説の流れを酌むものであることに間違ひはない》と述べている。他方、《最初癖のある文章にひつかつて難渋したが、そのうちにその喋舌りまくる話術の巧さに乗せられて一気に読み通した》という新田潤・本庄陸男・荒木巍「連名文芸時評(2)芥川賞の一作」(『中外商業新報』昭12・3・3)では、《これは全く小説の凡ゆる技法をこなしきつて、玩具にしてゐるやうなもの》とその技巧が手放しで賞讃されている。小林秀雄も「文芸時評(1)「普賢」について」(『読売新聞』昭12・3・3)で、《綿々たる饒舌は、暫時読者に娑婆の風について一種の錯覚を起させる力を持つてゐる》とした上で《作品の成功》の要諦を《作者のスタイルの柔軟さなり豊富さ》にみている。「普賢」を《困つた饒舌》と評す穂刈玄馬「速射砲 ヒットは『組閣双六』」(『報知新聞』昭12・3・3)は、《時々時代批判の滓みたいなものをひけらかして意味なく陋巷を映す描写力の旺盛さもかう方面なくから廻りしては才能の浪費だ》と批判するが、逆説的に石川淳の《才能》を評価した言明となつてゐる。《作品》よりも「作

家」が賞をもらつた》とみる河上徹太郎は「文芸時評⑤芥川賞の両作品」(『東京日日新聞』昭12・3・3)で次のように述べている。

石川淳氏はフランス文学の翻訳家として私などは以前から名を知つてゐたが、その作品は最近二、三年来雑誌「作品」へ連載されたのを読んで來た。「葦手」「貧窮問答」それから今度の「普賢」など一種独特の教養を匂はせたおしやべりとデカダンストに惹かれて讀んだが、「普賢」が最も小説らしい骨格を備へてゐるやうである。

ここでも、『作品』誌上で積み重ねられてきた石川淳のキャリアが参照・評価された上で、スタイルとしての饒舌とモチーフとしてのデカダナスが看取され、小説としての完成度が高く評価されている。賛否はわかれるにせよ、「普賢」をめぐる議論された論点はここに集約されており、《スタイルは江戸文学の戯作風の夢に玄人じみた気取りと、ややペダンティックな思索的な独自との混ぜ合せ》・《まさに饒舌そのものといふ感じ》といった麻四門「小説採点簿」(『文芸』昭12・4)の評言も、その変奏といえる。

また、題材偏重が難じられはじめていた芥川賞への影響も取り沙汰された。そのことは、大井眞爪「壁評論 春の芥川賞決定」(『読売新聞』昭12・2・12)で次のように語られている。

「普賢」は多少饒舌であるが、心理の陰翳を細かく描いて叙情味のゆたかな作品である。芥川賞はこんどもまづ成功したと云つていい。第一回からの受賞の結果を見ると、いつも新奇な材料の威力が勝ち、その点がかく作家たちの間に問題となつてゐたが、「普賢」の入賞で、そんな問題も自ら解消するだらう。

他にも、《石川淳の饒舌体の描写は近代意識の氾濫といふ点で高

見順とは違った説話体の作者だが、今後の期待は疑問だ」とその将来性に疑問符をつけた穂刈玄馬「速射砲 作家はまさに四十から」(『報知新聞』昭12・2・16)からも、《これで芥川賞を賭ける同人雑誌の投機趣味も清算され、真に次代を担ふ野心をもつ真率不逞な青年作家の精進が続けば占めたものだ》という声がある。

さて、当の芥川賞受賞の与件となつたのは『作品』である。受賞作「普賢」の掲載誌というだけでなく、そこに至るまでの石川淳のキャリアは『作品』誌上で積み重ねられてきたのだ。受賞をうけ、『作品』は「石川淳氏「普賢」芥川賞受賞記念号」(昭12・4)を刊行する。《石川淳氏の「普賢」が芥川賞を受賞したことは、石川氏の天稟と努力を知つてゐる者には極めて当然の結果と思はれるでせうが、その真価が正しい評価を得て多くの人の注目を惹き、今後ますます氏の小説が非常なる期待をもつて迎へられる機会を与へられたことは何といつても慶賀に堪えません》と、興奮のうちに書かれた、小野松二「少し興奮して」から引いておこう。

ところで、処女作にして傑作である「佳人」の発表後さへ既に二年になるのですから、思へば、石川氏もさだめし永らく御辛勞だつたこととせう。が、実をいふと、私も、石川氏に一票を投ずること今度で三回目でしたので、それだけに、実に欣快に堪えぬものを覚えます。つまり、自分の一票が微力ながら選衡のお役に立つたかと思ふと、と同時に、自分の一票が我田引水的なものでなく、実に清浄な一票だつたことを委員によつて証明されたかと思ふと、二重三重の喜びに堪えません。このついでに少し威張らしてもらふと、もし、芥川賞なるものが「作品」の創刊当初から設定されてゐたならば、或は今回が三四度目ぢやなかつたかと大へん自惚れてゐる次第。とにかく、

今後も、極力立派な作品の発見に努め、この有意義な企てに微力を尽したい次第です。³⁷⁾

ここに、昭和一〇年前後における『作品』の役割・位置づけは、芥川賞の配置も含め、見事に示されている。石川淳本人はといえば、「礼儀」で《わたしはただ賞に対する礼儀として一言「うれしい」と云ひ、そしてわたし自身の発展のためにそのうれしさを即座に忘れてしまひたい》と述べるが、『作品』関係者からは温かい言葉が寄せられる。³⁸⁾ 印象的なのは、《十年前には福岡の高等学校の教官室》で机を並べていた本多顕彰による「一昔前の石川氏」で、そこでは石川淳の小説家以前／以後のギャップが語られている。

(両者が東京へ引き上げてから／引用者注) 爾来約十年、互に相会ふこと全くなく、「作品」に突然(さう私は思つた)「普賢」が載つたのを見て一寸意外な感に打たれた。読んでみてもますます意外だつた。これは私の知つてゐる石川氏とは全く違ふと私は思つた。「略」左翼的な経済学者になるかと想像された石川氏が作家になつたといふことは、いろいろの感慨を私に催させる。

作家・作品評としては、『普賢』二百八十枚は達者で実に面白い」といふ衣巻省三が「普賢について」で、『普賢』は石川氏の芸術信条を多少とも作品人物行動や、描写の中に溶し込んだ小説」と、高市董三が「石川氏の印象」で《一癖ある小説を書く人で、掴みどころのないところから材料を引っぱり出して来るあたり、そしてそれでゐて一つの雰囲気を奇麗に掴んでゐるあたり、石川氏は芥川賞に値する人だ》と、それぞれ石川淳の立場に即した理解を示している。石川淳を《異色ある存在》と称す古谷綱武は「石川淳氏について」で、次のようにその現代性を論じている。

石川氏の場合、作家を宿命とし、天職としながら、正統的小説を書くための過不足ない楽天的作家精神にだけ生きるためには、過剰な人間性が障害となつてゐる。悲劇的な作家である。

しかしそれは、むしろ石川氏個人のものであるよりも、石川氏によつて、一部の現代作家のもつてゐる、かかる悲劇が如実に語られたといふべきではなからうか。

ここにいう《悲劇》とは、その年齢差にもかかわらず、本稿1で論じてきた新人の「類似性」とも通底するものであるはずだ。石川淳においては、その「新しさ」は饒舌体というスタイルにおいて顕現し、昭和一〇年前後の新人（小説）群と共振をみせる。

《普賢》の巧みな説話術は、これを遠く宇野浩二あたりから筋をひくもの《だと位置づける名取勘助「小説月評」》（『新潮』昭12・4）では、《当今の小説道》においては《描写が否定され、説話が幅をきかしてさへゐる》がゆえに、《普賢》の説話形式もかへつて時を得顔に見える》と、時流とスタイルの関係が指摘される。

このスタイルの「新しさ」を考察するには、徳永直の議論が示唆的である。「新人作品の特徴(一)」(『東京日日新聞』昭12・5・13)で「普賢」に論及する徳永は、《二百頁足らずの小説を二度抛げだし、三度目は声をたて、読み、四度目にはもう意地づくで辛つと読み終へ》、《到頭この小説には何が書いてあるのか、作者は何を語らうとしてゐるのかよく判らなかつた》とした上で、《要するに「普賢」はあまり沢山筆を費す程の価値ある作品とは思へない》という結論に至り、《芥川賞に果して値したか疑ひをもつ》。しかし、「新人作品の特徴(二)」(『東京日日新聞』昭12・5・14)において太宰治「廿世紀旗手」、高見順「嗚呼いやなことだ」・「起承転々」なども含め《新人といはれるこの人々にある共通したものがあるのによつ、

かつた》として、《筋の無き加減、構成力の弱さ。漚しないお喋べりの連続と、大胆と思はれるほどの文章の混乱、微弱な内容に著せかける大袈裟な最大級の形容詞》といった特徴をあげ、右の諸作をその《代表》と位置づける。

こうした見方に交差するように、河上徹太郎は「文芸時評⑥頽廢の小説と反撥の小説」(『東京日日新聞』昭12・3・4)で次のように高見順／石川淳の《饒舌》を論じている。

高見順氏「地下室」(日本評論)の主人公も一種の左翼くづれだが、このデカダンスもやはり独自のものです、単なる左翼の失脚による絶望とは片付けられず、のみならず、石川淳氏がデカダンスに甘えてゐるものがあるに對し、もつと覚悟のきまつたデカダンスに悟入してゐるものがある。高見氏の作風は一種の饒舌だといはれるけど、その点でも石川氏の方が遙に饒舌家であり、高見氏は小説家である。

いずれも新人の饒舌体を肯定／支持する立場からの言表ではないにもかかわらず／それゆえ、そこに従来にない特異性が見出されている。ここに、「現代文学について」(『新潮』昭11・2)の中村光夫による、昭和一〇年前後の文学シーンを視野に収めた次の議論を重ねてみるならば、その歴史的な意味が浮上してくるだろう。

現代文学混乱の眞の惨めさは、それが社会の混乱を捉へんがための文学の積極的な錯乱ではなく、社会の混乱に強ひられた文学自体の崩壊、文学精神の弛緩だといふ点に在するのである。〔略〕だが、文学を生むために先づ文学を疑つてかかる必要が今日ほど重要性をおびたことはないのだ。文学に對する疑惑なくして近代文学の歴史はあり得なかつたのみではない。すべて眞に新しい文学は前代の文学技法の決定的な否定の上に築かれ

たのだ。

こうした見方を敷衍するならば、諸手をあげて歓迎されたわけではないにせよ、さらにはその取り組みと成果はそれぞれであるにせよ、新人の小説が《前代の文学技法の決定的な否定》を体現しようとしていた限りにおいて、それは小説としての出来不出来とは別に、³³新しさへの試みだったはずである。それは、たとえば本稿Ⅱで検証した、『作品』新人特集掲載小説群におけるモチーフの重なりについてもいえるし、こと、饒舌体というスタイルはその代表的な表徴の一つである。その意味で、饒舌体というスタイルをきわだつた特徴とした石川淳が、「普賢」で新人賞³⁴芥川賞を得たことは、妥当であると同時に、右の見解の正しさを明かし立てる何よりの証左であるはずだ。そうした様相を積極的に意味づけ、石川淳の饒舌体小説群を昭和一〇年前後の³⁵新しさの象徴とみるならば、次の城左門「情熱の光芒」小説集『普賢』について³⁶（『東京日日新聞』昭12・5・31）の評言へと結実するだろう。

石川淳氏作、芥川賞授賞小説「普賢」は、わが邦に伝習された、十九世紀以来の外国文学的思索法と、その表現形式——といふより扱ひ方が、我等日本人小説家の地肌、骨肉となり切つたことを示すに、その最も代表的な、好適例の一つであらう。このことは、わが邦の文学的文明の進歩を意味する。と同時に、此処まで来た、小説文学の今後の展望に、重大なる暗示を与へるものだ。

『作品』に見出され、『作品』誌上を中心に小説を書きついできた石川淳が、第四回芥川賞を勝ち得たこと——それは、長い雌伏をへた同人雑誌作家からみれば、³⁷鳶に油揚げをさらわれた³⁸ようにみえたかもしれない。それでも、石川淳もまた昭和一〇年前後の新人と

同様の歴史的条件下で類似した世代体験をへてきており、小説のモチーフ／スタイルもまた多くを同世代作家と共有していた。総じて、『作品』という檜舞台から小説家として出発した石川淳とは、昭和一〇年前後の³⁹新人の季節⁴⁰に登場し、芥川賞によって新人と承認された、⁴¹新人らしさ⁴²を集約⁴³体現した新人に他ならない。

注

- (1) 野山嘉正・安藤宏編著『近代の日本文学』（放送大学教育振興会、平成13）
- (2) 曾根博義「〈文芸復興〉という夢」（『講座昭和文学史 第二巻』有精堂、昭63）他参照。
- (3) 安藤宏「小説の新世代」（『岩波講座日本文学史 第13巻』岩波書店、平成8）他参照。
- (4) 参加者は、深田久弥・広津和郎・川端康成・小林秀雄・直木三十五・佐藤春夫・杉山平助・徳田秋声・横光利一・宇野浩二・菊池寛。なお、杉山は『文学界』とか「行動」なんといふのは、僕は新人を出すといふことだけが使命のやうに感じてゐます」と発言している。
- (5) 杉山平助・大宅壮一「放談会」（『文芸』昭11・2）で大宅は、『昔は改造か中央公論に一度出れば、それで存在が確立して居たが、今日二度や三度出たつて、少しも確立しないからね』と発言している。
- (6) 第一回芥川賞選考後、菊池寛は「話の層籠」（『文芸春秋』昭10・9）で、『芥川賞選定のため、久しぶりに新進作家の作品を、少し読んで見たが、しかし自分は失望した。末梢的な新しさで、ゴマかしてゐる丈で、実際は十年前に比して、少しも進歩してゐないと思つた。殊に、新奇を装つてゐる表現は、新進作家の作品を、いよく仲間的にして、

- 一般の読者階級から離れさせるものではないか」と述べている。
- (7) ヘスゲン「照明弾」(『文芸首都』昭11・2)にも、『同人雑誌が芥川賞以来チヤナリズム線上に浮び上つたことは目出度い限りだ。(略)けれども、それをいいことにして、いやに文壇臭い一つのタイプが、近頃の同人雑誌に出来て来た』と指摘している。
- (8) 拙論「石川達三『蒼氓』の射程——題材の一九三〇年代一面——」(『立教大学日本文学』平14・12)参照。
- (9) 拙論「小田嶽夫、文学青年から芥川賞作家へ——支那・同人雑誌・『城外』(『ゲストハウス』平22・10)参照。
- (10) 伊藤整は「新鮮な題材 小説についての雑感(一)」(『都新聞』昭11・10・10)で、『芥川賞その他の文学賞や懸賞入選作に殖民地とか海外のものを題材にした作品が多いといふのは、一種の常識』だと述べている。
- (11) 平田小六・真船豊・福田清人・高見順・徳田一穂・石川達三・豊田三郎・荒木巍・伊藤整「青年作家は語る」(『新潮』昭11・9)で福田は、次のように発言している。『僕等の時代の連中といふのは、大抵先づその内部へ深まる前に外部に左右されてしまった。それは大概マルキシズムの波高い時に文学をはじめたので、姿勢が動揺して、何か世間とか外部とかいふものに自分を伸ばし過ぎてゐたんだ。』
- (12) 島木健作・矢崎弾・徳田一穂・井上友一郎・田村泰次郎・保田與重郎・荒木巍・丹羽文雄・新田潤・庄野誠一・十返一・田辺茂一・豊田三郎「座談会 新文学のために」(『行動』昭10・8)で田村/島木は、次のように発言している。『**田村** 今の新人の最も大きな苦しみであり、又探求しようとしてゐるのは何であるかといふ問題ですけれども、昔の作家の苦しんだやうな苦しみ、さういふ苦しみが今崩壊しつつ、あつて、例へば道徳の問題だとか、男女関係の問題だとか、さういふやうなものは崩壊しつつ、あつて、別のものが今度は要求されねばいかんといふことは確かだと思ふのです。』**島木** さういふ色々の時代の問題に対して、既成作家が取上げないものを、新人はそれぞれ傾向や何かは違ふけれども、やはりさういふ時代的问题に非常に敏感であつて、新しいものを付加してゐると思ふのですがね。』
- (13) 他にも、大宅壮一「文芸時評(完) 化物はあない」(『東京日日新聞』昭10・11・3)、十返一「脆弱新進作家論」(『三田文学』昭11・1)に同様の指摘がある。実作者としては、伊藤整が「新人作家」(『新潮』昭11・12)で『今の三十歳前後の新人作家たちは、左翼運動、それも学生の左翼運動が中心であつた時代の、旋風のな思想の嵐を見て来た人々として、一番特色を持つてをり、文学史的にも類例のない一つの時代を形成してゐる』と述べている。
- (14) 掲載作は、平田小六「雨がえし」、近藤一郎「箭」、南川潤「暴力」、富本陽子「明日」、新田潤「突つかひ棒」、木暮亮「胸毛」、徳田一穂「花粉」、平林英子「日常事」、野口富士男「喜吉の昇天」、山内せい子「ひとで」、荒木巍「洋灯」、阪本越郎「鯛の巢」、田村泰次郎「冬」の一三編。なお、同特集は青野季吉「文芸時評(五) 老大家から新進まで」(『東京朝日新聞』昭10・3・3)で、『いづれも余りに短篇にすぎるので、これで各新進作家の特色を通観しようといふ虫のい、注文にはいさ、か不向であるが、文壇の新時代のたのもしさ、または頼りなさ、これでいちおう窺へなくもない』と評される。また、武田麟太郎は「文芸時評【一】『雑誌』と『小説』」(『報知新聞』昭10・3・4)で、『ジャーナリズム上には初見参の若武者ぞろひであるが、それが与へられた枚数が僅々二十枚であるのを思へば、感慨に堪へないものがある』と述べている。
- (15) 掲載作は、李兆鳴「初陣」、浅井花子「あの夫婦」、香木直之「紙芝居——託児所の内——」、大元清次郎「貧民窟」、渡辺寛「詫びる」、井上健次「情勢」の六編。
- (16) 掲載作は、宮内寒彌「中央高地」、山本継一「フェドーシヤ一家との交渉」、水盛源一郎「河と踊子たち」、岩越昌三「石生藻」、小田仁

「魚」、金原健児「若い父」、野村利尚「灯舟」、木山捷平「尋三の春」の八編。

(17) 拙著「昭和十年前後の太宰治〈青年〉・メディア・テキスト」(ひつじ書房、平21) 参照。

(18) 《昨今の新人登場が、ジャーナリズムの上での実利的な問題に見える》という「文芸時評」(『新潮』昭11・1)で河上徹太郎は、「要するに作品が手際のいい、人間報告にはなつてゐるが、作者の個性の主張低音の上に咲いた雑食の歌を歌つてゐない」と不満を漏らす。《そこには勿論時代の罪もあるだらう》と留保をつけ、《精神界の錯乱が極度に達し、その中で何もかをつかまうとすることが却つて此の錯乱の解決に逆行することになる時代、しかも政治主義の方便が荒々しく社会生活の表面に筋張つて現れて之を弾圧してゐるやうな時代、現代がかかる時代であつて見れば人生の粗野な一面に目を向けて戯作者になつてゐるのが小説家の一つの正当な態度かも知れない》と述べている。

(19) 他にも、竹葉天金「学芸サロン 新進四人の四様態」(『中外商業新報』昭10・12・6)や、「作者が小説を書いてゐないで、小説が小説をかいてゐる、これが新人小説の一つの逆説である」と指摘する中島榮次郎「新人について(文芸時評)」(『コギト』昭11・1)など、同特集への同時代評は、論点ともども多い。

(20) 高見順「私生児」を評しながら、武田麟太郎は「文芸時評(現代語の欠如)」(『東京日日新聞』昭10・11・27)で、「特により多く新進作家に見られる文体、文章の不統制は何に由来してゐるのであらう。／簡単に云へば、われわれが今日の現実を的確に表現し得る言葉を持たない」と云ふことだと評しているし、矢崎弾も「新人作家の最近の特殊性 一〜四」(『時事新報』昭11・4・17〜22)で「太宰治や高見順の文体」にふれて、「かれらは今日の時代思考をもるにもつともふさはしいと信じた文体を構成してゐる」と評価をしている。また、徳田秋声・尾崎士郎・青野季吉・武田麟太郎・阿部知二・新居格・中野重

治・広津和郎・中村武羅夫「最近文壇の中心問題」(『新潮』昭11・11)で中村は、「既成作家は表現の目標がはつきり決つて居つたのが、青年作家には、それに対する信用、信頼がなくなつて、何か別の形のもので小説といふものを拵上げて行かうとするやうな意図があるのぢやないかと思ふ。」と発言している。

(21) 谷川徹三「雑誌『作品』について」(瀬沼茂樹編『作品』復刻版解説・執筆者索引) 日本近代文学館、昭56)

(22) 拙文「作品」——新進作家の檜舞台」(『太宰治スタディーズ』平22・6) 参照。

(23) ③は、烏丸求女「壁評論 評論界の新人と不幸」(『読売新聞』昭10・8・16)で、「評論界の新空気がまぶこ、に捉へられてゐる」と高く評価された。

(24) ⑤・⑥は、車引耕介「壁評論 新人コンクール一瞥」(『読売新聞』昭11・1・15)で、「なかなか面白い企てでデパートや市場に似た便利さが何より」、《色とりどりで、どれがずば抜けて優れてゐるとか、どれがひどく幼稚だとか、そんなひどい等差はない》と評された。

(25) この時期、同人雑誌／商業雑誌掲載小説の質は近似していく。たとえば、宮内寒爾「中央高地」を読んだ室生犀星は、「文芸時評」(『新潮』昭10・9)で、「改造」や「中央公論」に発表されたら、批評家や識者を動かすに十分な作品だと評している。

(26) 浅見淵「文芸時評(才気のサンプル)」(『信濃毎日新聞』昭10・8・5)で、「暗く胸に迫つて来るものがある」と評された。

(27) 憲治・種樹・和一・仁・正治「紀元懇話会 主として六月七月の雑誌小説について」(『紀元』昭10・7)に好意的な評がでた。

(28) 浅見評・注(26)で、「こまかい味を出して心理的に巧みに描かれてゐる」と評された。また、舟橋聖一「文芸時評(5)新潮・作品の諸作」(『中外商業新報』昭10・6・29)では「描写の達者さは驚くほど」と評価された。

- (29) 舟橋評・注(28)で《取材も異つてゐたし、まとまりもあつたが、古い人道主義の匂ひがこのこつてゐるのは損》だと評された。
- (30) 《文壇に於けるこの頃の方言の流行》の一例として「雀こ」に言及する「文学と方言」(『文芸雑誌』昭11・5)の浅見淵は、《方言のもつてゐるリズムを巧みに利用して、郷里——ひいては、人生に対しての激しいノスタルヂックな感情を滲みださしてゐる》と評している。
- (31) 浅見評・注(26)で、《この頃東京市内に簇出してゐる以前の酒場と喫茶店をチャンボンにしたやうな、美しい少女を集めてゐる新しい喫茶店の風俗人情が、巧みに描かれてゐて興味深かつた》と評された。
- (32) 伊藤整「文芸時評」(『文芸』昭10・9)で、他作品とあわせて《特別な材料を扱つてゐて読みごたへがあつた》と評された。
- (33) 伊藤評・注(32)で、《いつもながら綺麗にまとまつてゐて、そのない作品》と評された。
- (34) 浅見淵「文芸時評(完) 新人の諸作品」(『信濃毎日新聞』昭10・7・4)で《推奨》されている。
- (35) 阿部知二「分担時評【完】 新人の作品 二月号「三田文学」」(『読売新聞』昭11・2・4)で、新人の他作品とあわせて《何か突き抜けて来るものが足りない。》と評された。
- (36) 拙論「富澤有為男『東洋』の場所、あるいは素材派・芸術派論争のゆくえ」(『文芸研究』平20・3)参照
- (37) 小野松二「(後記)」(『作品』昭12・4)には、《石川淳氏の「普賢」(『作品』昭和十一年六、七、八、九月号所載)が芥川賞を受賞した。以て本号をその記念号とした所以であるが、本誌が又、石川氏の実力を広く世間に紹介することに役立つことは欣快に堪えない》と記されている。
- (38) 他に、稲垣足穂「石川淳とJUNE BAG」、福田清人「石川淳氏——福高時代の思ひ出より——」、那須辰造「石川さん」が寄せられている。

*本稿の一部は、石川淳研究会・「太宰治スタディーズ」の会共催研究会における報告「昭和十年前後の新進作家——石川淳／太宰治と『作品』」(於埼玉大学・東京ステーションカレッジ、二〇〇九・九・一九)に基づいています。発表の機会／当日の貴重なご意見を賜った関係各位に、この場をかりて御礼申し上げます。

(二〇一〇年十月三十一日受理、十一月十八日掲載承認)